

徳島県戦没者記念館

—あしたへ—を訪問して

青年部副部長 中岡 美佳

高知県遺族会青年部で徳島県戦没者記念館を訪問した。昨年の遺族大会で、徳島県遺族会の増矢会長の記念館についての講演をお聞きして、大会の最中から「是非、行ってみたい。」という声があがり、この二月に実現したもので「青年部」として企画された初めての行事となった。

徳島県護国神社の一角にある記念館に入るや否や目に飛び込んでくるのは、長く伸びたパネルに飾られているたくさんの白黒の肖像写真。遺族の方から提供を受けたという徳島県出身の戦没者の方の遺影で、約8千人が出身地ごとにお名前や年齢、戦没地等を記し展示されていた。

『誰もが家族を守り、地域を守り、かけがいのない存在であったのに命により戦地へ赴き、望郷の願い叶わず戦場の露と消えた』

記念館の前に建っている「戦没者を見送る家族の像」の碑文に記している一節だ。

そう、ここに展示されている誰もがかけがえのない存在であり、写真のまなざしが戦没者の思いや生きた証を語っているように感じた。

写真の中には祖父の戦没地フィリピン・ルソン島で戦死された方もたくさんいて、もしかしたら、祖父と一緒にいたのでは？と思いがらひとりひとりの写真を見て回った。

記念館は様々なコーナーで構成されていて、戦争と平和をテーマとしたパネル展示、戦地から届いた

手紙などの遺品展示、図書や映像等は何れも足を止めてひとつひとつ丁寧に見ていきたいものばかりで、時間が経つのを忘れる程だった。

また、毎月第二土曜日に「語り部」による体験発表を行っているとのことだが、戦争当時を知る方の体験談はもとより、二十代、三十代の若い青年部の方々も、見聞きした話だけでなく青年部として活動するようになった経緯等、各自の戦争に対しての思いを発表されているとのことだった。

機会を作ってまた訪問し、次回は是非青年部の方の発表も聞いてみたいと思う。

令和2年5月発行

高知県遺族会報第789号より